

データベースに登録された維管束植物の標本数が 30 万点に達しました

生命の星・地球博物館に資料として保管されている標本や写真、図書・雑誌などは、コンピュータを使ったデータベース「収蔵資料管理システム」で管理、運用されています。さまざまな分野の資料がある中で、維管束植物の登録標本数が、2017年1月20日、30万点に達しました。維管束植物の標本はいわゆる「押し葉標本」で、植物の名前や採集者、採集地、採集年月日などを印字したラベルとともに、台紙に貼付され、いつでも利用出来るように保管されています。

登録点数の推移

現在は、収蔵資料管理システムで管理されている標本のデータですが、生命の星・地球博物館の開館前は、当館の学芸員の勝山輝男が当館の前身である県立博物館の学芸員時代に dBaseIII というソフトウェアを使って自作した標本登録プログラムにより管理されていました。とは言え、データベース化されたのは、県立博物館が、当館へと再編整備される直前の5年間ほどでした。このデータベースに最初に入力されたのは、『神奈川県植物誌 1988』のために収集された標本でした。その入力作業は、高等学校などを定年退職され、博物館に再就職された方々により進められ、植物誌の標本の登録完了後は、県立博物館に収蔵されていた標本の登録作業を進めました。

さて、当館の開館後に稼働し始めた収蔵資料管理システムですが、当初はシステム上の問題も多く、うまく動作しないこともあり、委託業者のシステムエンジニアによる登録や学芸員による試験的な登録などが混在しています。すべてのデータに登録日時と登録者が記録されていますが、検証すると腑に落ちない部分もあります。ここでは、委託業者により1996年4月までに登録された166,142点を収蔵資料管理システムに初期移植されたデータとしました。ただし、この移植の際には、入力されていたデータの不備などから、移植できなかったデータも存在します。

登録点数の推移を図1に、年度ごとの登録点数を図2に示しました。年度ごとの登録点数の差異にはそれぞれ理由があります。データを大量に移植した1995年度は別にして、1996年から1999年までの少しずつ増加する入力点数は、収蔵資料管理システムがある程度、安定して稼働するようになったことによります。2000年度に点数が少なくなり、さらに2001年度の登録点数が0点なのは、情報関連機器の更新と収蔵資料管理システムのバージョンアップが行われ、その新しいシステムが不完全で、稼働が遅れたこと、『神奈川県植物誌 2001』の編集・刊行とそれに関連した特別展開催準備に忙殺されていたことによるものです。その後もしばらく登録点数が少ないのは、システムの不安

定さの影響が大きかったと思われます。その後、2006年以降の登録点数の増大は、さらにバージョンアップされたシステムの使い勝手が著しく向上したこととともに、サイエンス・ミュージアムネットへのデータ提供業務によることも大きいと思われます。2014年以降の極端な増大は、現在進めている新しい『神奈川県植物誌 2018』(仮称)のための調査による受入れ標本の増大によるものです。

標本の採集者

登録された30万点の標本の中には、歴代の学芸員が自ら採集したものや、購入したものもありますが、神奈川県植物誌刊行のための調査により採集されたものや、研究者から寄贈を受けたものが大部分を占めています。図3に採集者が単独で採集した標本の点数を示しました。もっとも多くの標本が登録されていたのは、県立博物館の学芸員であった大場達之氏採集のもので30,015点(10.0%)でした。次いで、日本最後のプラントハンターとも呼ばれる古瀬 義氏の25,326点(8.4%)、大場氏とともに、県立博物館の学芸員であり、当館にも勤務された高橋秀男氏の24,529点(8.2%)、当館の学芸員である勝山輝男の14,780点(4.9%)で、以下は少し差が開きます。図3に示した勝山以下の採集者は、田代道彌氏以外は、それぞれの点数に神奈川県外での採集標本も含まれますが、神奈川県

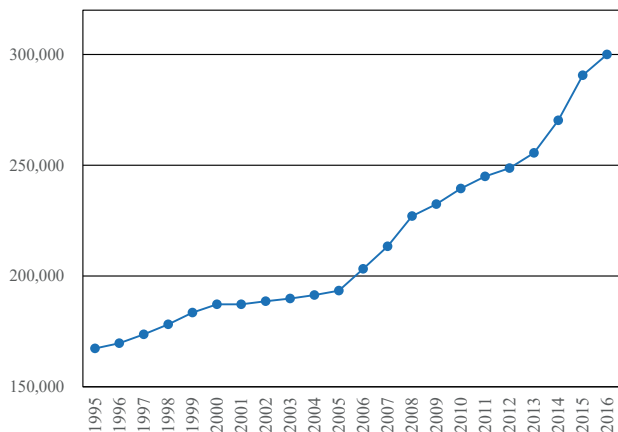


図1 登録点数(累計)の推移。
1995年度の登録点数には、1994年度の3月に登録された移植データが含まれ、2016年度の登録点数は30万点に達した段階での点数です。

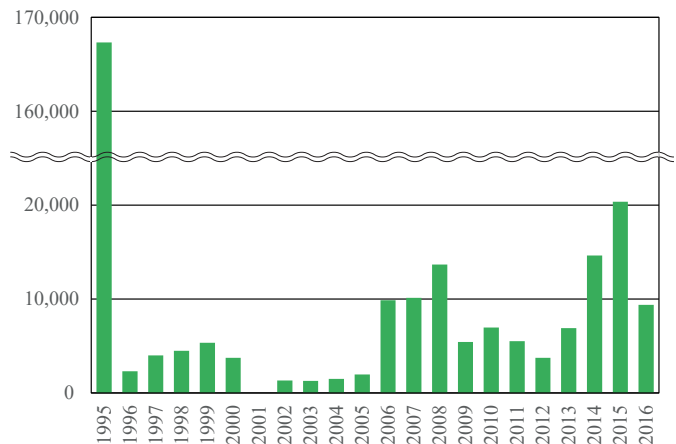


図2 年度ごとの登録点数。
1995年度と2016年度の登録点数は、図1同様。

植物誌のための調査に長期間に渡って協力いただいている方々です。

古瀬氏は逝去されており、その採集標本はすべて登録済であることもあり、今後増えることはありません。しかし、大場氏と高橋氏が採集した未整理で未登録の標本はまだ多数あり、今後も両氏の採集標本の登録点数は増加します。当館の維管束植物標本コレクションは、名実ともに大場氏と高橋氏のお二人が基礎を作ったことが再確認されました。なお、著者の採集標本は408点で番外でした。

標本の採集地

図4に都道府県別の採集標本点数を示しました(海外産や不明も含む)。国内産の標本点数は297,372点で、海外産は2,628点とわずかです。国内産の標本の中には、ラベルの採集地情報が十分でないものや都道府県境で採集されたもの、旧国名で記されたものもあり、現在の都道府県で示せないものが1,842点あり、ここでは不明としました。これらを除いて、都道府県別の採集標本点数がもっとも多いのは、やはり神奈川県で176,908点(59.0%)でした。この大部分は、『神奈川県植物誌1988』、『神奈川県植物誌2001』、現在進めている『神奈川県植物誌2018』(仮称)のために採集された標本です。次いで、長野県の14,997点(5.0%)、東京都の12,246点(4.1%)と続きますが、登録点数の多くを占める大場氏と高橋氏が、高山や島嶼(伊豆諸島や小笠原諸島は東京都に属します)の植生や植物相を研究対

象としていたこと、大場氏が東京都、高橋氏が長野県出身であることによるものです。以下、静岡県、北海道、鹿児島県、沖縄県、千葉県、山梨県、栃木県となりますが、北海道、鹿児島県、沖縄県は、日本の北端と南端に位置する都道府県で、独特の植物相を有すること、静岡県、山梨県は高山植生を有するため、大場氏と高橋氏に加え、古瀬氏も多くの標本を採集していることによります。また、栃木県は、古瀬氏が居を構えていたことがその点数の多さに影響しています。

逆に点数が少ないのは、島根県の184点で、大阪府、佐賀県、宮城県が300点以下でした。当館の地理的な位置からか、関西方面の標本が少ないようです。

標本管理に関わった方々

このような当館の維管束植物の標本ですが、その整理、登録、保管には、多くの方が関わって来ました。まずは、先にも述べた当館の維管束植物コレクションの基礎を作った県立博物館の大場達之氏と高橋秀男氏、大場氏の後を受け、県立博物館を経て当館に勤務された勝山輝男と、木場英久氏、そして筆者、木場氏の後を受けた大西 亘の6人の学芸員がいます。また、標本整理や登録の地道な作業に、学芸員以上に力を発揮していただいたのは、博物館に再就職された方々、現在も常に学芸員を支えている当館のボランティアの皆さんです。そして忘れてはならないのは、実際に野外で植物を採集し、標本を博物館に収めていただいている神奈川県植物誌調

査会の会員の方々をはじめとした、採集者の皆さんの存在です。

未登録の標本

収蔵資料管理システムに登録された標本数が30万点に達したことで、本稿をまとめました。ですが、少し触れた大場氏や高橋氏の採集標本のほかにも、未整理標本が存在します。代表的なものでは、榎山泰一氏、三谷 進氏、松浦茂寿氏と正郎氏、秋山 守氏、横浜国立大学生物学教室の標本などがまとまった数で受け入れられており、その全貌は不明です。今回の30万点はいわゆる「キリ番」なだけであり、ただの通過点とし、今後も、ボランティアやアルバイトの方々の協力を得つつ、1967年の県立博物館開館以来、50年間の伝統を引き継ぎ、地道に標本整理を続けていきたいと思えます。

30万点目の登録標本

肝心の30万点目の登録標本のことを書いていませんでした。収蔵資料管理システムの管理番号によると、秦野市で2016年6月11日に採集されたマダケの標本(KPM-NA0184428)が30万点目の標本でした。この標本は、『神奈川県植物誌2018』(仮称)のために採集された標本で、県立博物館時代の1979年より神奈川県の植物相を調査し続けてきた当館としては、相応しいものであると思えます。また、現在、『神奈川県植物誌2018』(仮称)の刊行を目指して精力的な活動を進めていることから、その調査のための標本になる確率も高かったとも言えます。

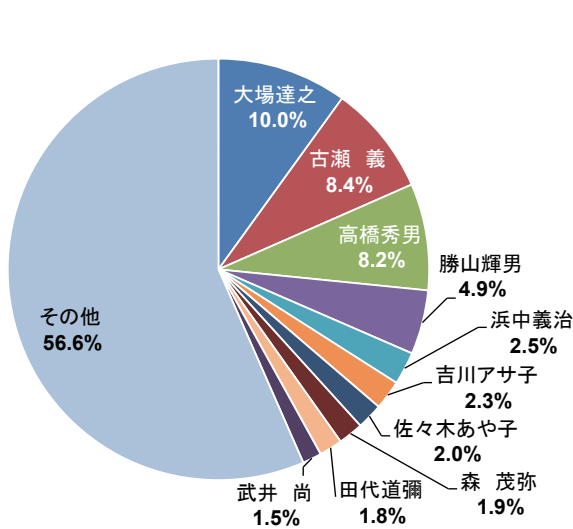


図3 採集者単独の採集標本数10傑.

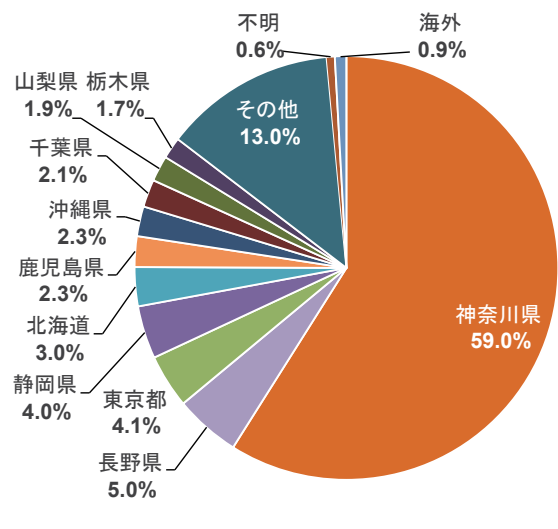


図4 採集都道府県別の標本数10傑.